
Laco ~僕らの運命~

10Time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lacoo 僕らの運命

【NZコード】

N7752Y

【作者名】

10Time

【あらすじ】

全ては、俺の所為なんだ。ある時、突然友人が学校に来なくなった。数日後、再び目にした友人は別人で…？主人公は本当の友人を探す為に国内一、人口の多い都市『本都』へ足を踏み入れる。そこで待ち受けていたモノとは…？

時は、よく分からぬ。

何も見えなし、何も聞こえない。真つ黒に染まつた世界。
俺は一人、暗い闇の世界を彷徨つてゐる。

もうあの日には戻れない。

一度と光を見ることはできない。

全部、俺の所為だ。俺の所為。俺の…。

闇の中では忌まわしい記憶しか飛び交わない。

嬉しかつた事、面白かつた事、楽しかつた事…。

それが全て闇へと変わり、闇へ奪われてしまつ。

あの日の日常は夢だつたのか、幻だつたのか、現実だつたのか分からぬ。

今、俺は何をしてゐるのだ？…。

少しずつ現実を取り戻してゐるもの、こんな考えをしてしまう時
がある。

もう戻れない。戻ることはできない。あの日に戻ることはできない
んだ。

そう自分に言い聞かすが、やはり忘れる事はできない。

一番楽しかつた時間を。

もし、この世界に神がいるといつのなら一つだけ願いを叶えてほし
い。

『もう一度、俺に光を叶えてほし』

この願いが叶うというのなら俺は毎日その願いを思い続ける。
また、光を見るために。

……一ノ門……。

薄ら聞こえてきた鐘の音で暗い世界から光の世界へとフロードインする。

どうやら俺は知らないうちに眠りについていたようだ。

黒板には一見、小説のように見えるがそれが小説なのか詩なのか分からぬ文がすらりと書かれている。

現代文か。それを見て一瞬で閃く。

一体どのあたりで寝てしまったのだろう？

担当の矢部春幸^{やべはるゆき}は寝ていたのを気にしなかつたらしい。

起きた時には既に姿が見えなかつた。

どうせノートに写すだけの授業。つまらないと感じてうつ伏せになり、そのまま……。

何となくその眠っている最中、懐かしい頃を思い出していた気がする。

しかし、もう思い出すことはできない。

どうして夢とはすぐ忘れてしまつものなのだろうか。

「うつそお！？ あつははは」

突然、耳に入る女性の声が聞こえたと同時に辺りのノイズが大きくなる。

俺には関係のない話し。クラスのみんなは席を立ち、友達と輪をつくって話をしている。

休み時間。

周りの話し声が過去を思い返されるようでちょっと切なく、鬱陶しいと感じる。

隣りに座る席の人はいない。空っぽの席。

数日前まで、そこに座っていた人がいた。

優しくて、明るくて、一緒にいると楽しいと思える存在の人。何の相談もなく、突然その人はここへ来なくなつてしまつた。

クラスのみんなはその事を話題にしない。誰も心配していないのだ。もし心配している人がいたとしても、『どうせ風邪でも引いたのだろ』くらにしか思わないだろう。

俺には分かる。なぜ、突然その人は来なくなってしまったのか。
それは全部、俺の所為だからだ。

俺は、大切な友人を”助けられなかつた”。

窓側の一番前の席で、頭を抱え込みながら自分の不甲斐なさに嫌気をさす。

席の後ろからは耳に障る嫌な話し声が飛び交つていた。

「あいつ今日も来ねえなー」

「もう来ないんじゃね？」

「そうだな。死んでるかもな！」

ふはははは。

数人の男子がまるで自分に向かつて発しているかのように笑う。
俺はその笑い声に腹が立ち、ぶん殴つてやるつかとも思った。
しかし、俺にはそのような殴れる勇氣がない。

俺は、弱い。

次の標的は自分なんだ。そう感じた。

バーンツー！！

爆弾でも爆発したかの様な大きく耳に響いたその音は、教室のドアを開ける音だつた。

反射的に振り向くと黒板手前の出入り口から金髪に、黒いライダースジャケットとそれに似た色のジーンズを履いた男が教室へ入つてくる。

他に、男の後ろにいた仲間とみられる若者たちもぞろぞろと教室へ入つてくる。

その数、十数人。

この学校は基本指定制服なのでその格好を見れば本校の生徒ではないと一目で分かる。

それから数秒も経たない内に教室内は沈黙と化した。

一番最初に入つてきた男がリーダーなのだろうか。

格好や漂っているオーラからすれば誰もがそう見えるだろう。
しかし窓側の席でもあり、その男の顔がよくわからない。

だが、誰かに似ていよいよつた顔つきだ。

男は教室中を見渡す。

その目は遠くからでもわかる、鋭い目つき。

この人たちは一体何者で、何をしにここに？

そう思つたとき、男が小さな声で何かを呟いた。

「殺さない程度にな」

そう聞こえた。離れていても確かにそう聞こえたのだ。

どういうことなのか頭の整理がつかなかつた。その瞬間

「おらああああ！」

静かな空気に突然、教室全体に響き渡る音が流れる。

それは男の後ろにいた仲間たちが出した声だつた。

男の仲間は一斉に走り出し、特定の男子を捕まえだす。

男子等は、まさか自分たちに来るとは思つてもいなかつたようであつさりと若者たちに取り押さえられた。

「オラッ！」

その声と共に、鈍い音が耳に入る。

運動マットに拳を勢いよく食らわすよつた音。

若者の蹴りや殴りが取り押さえられている男子等に降り注ぐ。

「あうッ！」

男子は抵抗もできなく、無惨にやられていた。

それを間近で見た女子は悲鳴を上げ、混乱に陥る。

特定の男子は殴られ、蹴られ、既に蹲つている者もいた。

「おい。こんなんでくたばつてんじゃねエぞー！」

床に蹲つている男子の襟元を締め上げ、殴る。

数分経つても尚、暴行は収まらない。

若者たちは手加減を知らないのか、容赦ない攻撃を休みも無しに繰り出していく。

「誰か助けうッ！」

助けを求めてこの人数だ。

クラスで一番力の強い男子でも止めに入ることができず、ただ茫然

と見つめることだけしかいられなかつた。

誰もがそうだ。

周りにいるみんなは助けようともせず見つめているだけ。

「「めんなさい。」「めんなさい。」「めうッ……」

男子等はわけもわからず謝り続ける。しかし、そんものは通用しない。

辺りには赤い液体が飛び散っていた。

この数分で、さっきまで普通だった男子の肌の色が血の色で真っ赤に染まつていた。

それを見た女子は悲鳴を上げながら誰かに助けを求めに行つたり、泣いていたり、顔を背けている者もいる。

自分だつてそうだつた。

あの赤く染まつた顔を見た瞬間、すぐに目を閉じてしまった。

一体この男たちは何なんだ！？

なぜこの男子等をこれほどまでに痛めつけるのか。

何か悪いことでもしてしまつたからなのか？

…

ある衝撃が頭の中に走る。

偶然…？いや、計画的な犯行。

よく見ると暴行を受けている男子は皆、羽田隆文はねだとかぶみと一緒につるんでいる者だつた。

そこには隆文の姿もある。もしかするとこれは……。

嫌な考えが浮かび上がり、リーダーと思われる男の方へと目を移した。

「…？」

なんだ……？

男は暴行されている男子等の方ではなく、此方に目を向けていた。

「もういいだろ？そこまでにしどけ」

目が合つたと同時に男は口を開き、若者たちに暴行をやめるよう指

示した。

仲間たちは大人しく暴行をやめ、男の許へ戻る。

すると男は威圧的な雰囲気を醸し出し、隆文に近づいて何かを呴く。興味本位で駆けつけてきた野次馬の騒めきがその声を搔き消し、よく聞き取れない。

そして男は呴き終わると隆文のことを数秒見据えて踵を返した。暴行された男子等は鬼を見ているかのようにガクガクと震えている。彼は一体、隆文に何を言ったのだろうか。

そんなことを思つてゐるうちに男の仲間とその男が教室から出て行こうとしていた。

「あつ……」

俺は何故かその男に声を掛けよつかと迷つていた。
誰なのか確かめたい。

目が合つたあの一瞬だけじゃ、よくわからなかつたから。

「ちょっと待つた！」

俺は走り、男に近づく。

もう引き下がることはできない。

声を聞いた男は立ち止まる。

その後ろ姿はやはり似ている。

「勇人……、だよな？」

そう。数日前から学校に来なくなつた春藤勇人の姿に。
しゅんとう ゆうじん

勇人であつてほしい。そう心で願う。

そして、男は振り返つた。

「！？」

驚きで何も声が出せず、訳が分からなかつた。

男の表情からは先程のような威圧が消えていて、その瞳は凍つたようだ。まるで意識が無くなつた人のような目をしていた。

その目は何を訴えているのかは分からぬが、それが酷い悲しみを背負つてゐるかのように見えた。

「すまん」

「えつ？」

男はそう言つと教室から立ち去つていく。

しかし俺はある瞳を見た瞬間に言葉を失い、何も考へることができるず、男を止める事ができなかつた。

それから数分後、生徒達の悲鳴を聞いた職員が通報した警察が駆けつけてきたが、男等はとつぐに消息を絶つていた。

被害者男子五名。軽傷一名、重傷四名。
重傷者四名については、すぐに病院へ運ばれ意識が回復しているらしい。

これは暴力団による犯行とされ、速報ニュースにもなり警察は捜査をしている。

画面に映つているアナウンサーは「恐ろしい」やら「なぜこんな人がいるのか」などと言つてゐる。

その発言に苛立ちを感じ、テレビの電源を消す。
自分の部屋へ移動するビデオへ横たわり、つい先ほどの光景を思い返す。

教室中に飛び散つた赤い色。赤く染まつた顔。後ろ姿。凍つた瞳。俺はあれから男の顔が頭から離れなく困惑していた。

「あの顔はやっぱり勇人だよな……」

つい心の声が表に出てしまつ。

でも、どうして？ 勇人は何故あんなことを？
考へるだけ考へてみる。

「……復讐」

考へて出た言葉がそれだつた。

それしか答えが浮かび上がらなかつたからだ。

「ごめん、勇人」

俺がもう少し強かつたらこんなことには……。

それにしても勇人が見せたあの凍つた瞳にあの言葉は何だったのだろび。

『すまん』

その言葉の意味を考えようとしたが、段々記憶が曖昧になり眠りへ沈みこんだ。

高校入学から1ヶ月後。

「あつ。その小説俺も読んだことある」

それが勇人と交わした最初の言葉だつた。

勇人が読んでいたものは人気の本でもないただの小説。しかしその小説には何かを引き付けるものがあり、俺もそれを読んでいたことがあつたのだ。

それからその小説の話を語り合つようになり、他に趣味や話が合つてか友達と言い合える仲になつた。

数ヶ月経つたある日、勇人は俺に不思議ことを言つてきた。

「なあ。俺とあんまり関わり持たない方がいいと思う」

その言葉にどんな意味が込められているのか、俺は分かつていた。この数ヶ月で色々な出来事があつたからだ。

俺が分かつていたことも勇人は多分知つていただろう。

勇人は誰よりも人の気持ちが良く分かるやつだつたから。

だから俺は、そんな勇人から離れたくないと思い、一緒にいると決めたんだ。

これからもこの先もずっと一緒にいる、と。

予めセツトしておいた目覚ましが鳴り、夢から現実へ意識が戻る。

「夢か…」

過去を思い出してしまう嫌な夢。

ピピピピピピ。

「ああつるさいなッ！」

俺は乱暴に目覚まし時計を叩き、ベッドから起き上がる。

部屋を出る際に外が気になり、窓から外の様子を窺う。

朝だから少し霧が掛かっている。

その霧の所為でよく判らなかつたが白い綿のようなものが降り注いでいた。

「……雪？」

それは綿ではなく、雪だった。

「ああそうか。もう、冬なんだ……」

その雪を見ていると寂しく感じてしまう。

あと数ヶ月で俺は一年生になるんだ。なんだか実感がわからない。

これから一人でやつていけるだろうか？

勇人のいない学校生活を。一人で…。

「ねえ。昨日学校に暴力団が来たんだって？ それにあなたのクラスだつて言つじゃない」

朝ご飯を食べている最中に母親が話題を持ち掛けてくる。触れられたくなかった話題。

家族なので当然それが話題になる。俺は「うん」と素つ氣なく返した。

「なんでそんな人たちが来たんだろう？ その暴力を受けた子たちが何か悪い事でもしたのかしらねえ？」

「俺にも分かんない。……いつてきます」

いつもは残さないご飯を残し、家を出た。

「ふうー、寒つ！」

そう独り言を呴きながら歩く。辺りはしんと静まり返つている。

誰も通らない道。

歩き始めてから数分経つと小さな公園が見えてくる。

いつも通っている道のはずなのに、何となく懐かしいと感じた。

それはいつも隣に誰かがいたことを思い返しそうになつていたから

なのがもしけない。

ここから先、いつも一人で歩いていた道なのだ。
でも今は……。

無言の時間。話すにも相手がいなく、学校へ着いた。
教室へ入り、いつもの席へ座る。隣に座るものはいない。
なぜなら隣りは勇人の席だからだ。

勇人が隣りになつたときは嬉しかつた。

嬉しくて授業中も話して先生に怒られたつけ。
それもつい最近のことだったのにな。

そういうえば朝会の始まる時間だというのに、クラスの人数が少し足
りない気がする。

隆文等の姿が見えない。

昨日、あんなことがあつたんだもんな。

チャイムが鳴り、同時に担任の矢部が教室へ入つてくる。

矢部は教壇の前に着くと真剣な表情で口を開く。

「えー、みんなも知つていてると思うが、昨日の件で男子五人と女子
三人は欠席だ」

昨日の件　。

欠席の人よりも先に勇人の顔が浮かんだ。

勇人、今何をしているのだろうか。

何れにせよ警察から逃れていることには間違いない。

男子五人　。昨日暴行された人たちだ。女子は……、良く分から
ない。

女子も昨日の件と言つていた。多分精神的にきたのだと思う。そう
考えるのが一般的だろう。

そしてそれから、勇人の噂が校内中に流れた。

奴は犯罪者だ。暴力団の一員だ。など。

俺はそんな噂に苛立ちを感じていた。

勇人の事を何も知らないくせにペラペラ言つてる肩共め。そんなこ
とを心の中で思つていた。

だが勇人の事を一番知らなかつたのは俺だつたのかもしれない。

終業式

勇人の噂は半年程でなくなり、その存在もが消えたかのように忘れ去られていた。

あの事件以来、勇人は学校どころか俺の前に姿を現すことは一度もなかつた。

当然だろう。警察も未だに捜査を続けているらしい。

この時期、そんな話を耳にし少し、嬉しかつた。

まだ勇人は捕まつていない。いや、勇人が完全に忘れられていなくて良かつた。

「では、これにて終業式を終わります」

その言葉と共に長かつたような短い学校生活の一年が終わつた。

それと同時に俺はあることを決心する。

勇人がいないとこんな生活楽しくない。

だから、勇人を探しに行く、 と。

必ず見つけて一緒に高校を卒業しよう。

時は四月に入ろうとしていた。

ここは、自分が住んでいる町とは全く逆の世界。人や建物などテレビでしか見たことのないほど無数にある。それは恐怖にも感じた。

もしかしたらここにいるかもしれない。いてほしい。

そう心で願いながら俺は踏み入れたことのない未知の世界へ足を踏み入れる。

道を歩いていると自分も兵隊になつてしているかのような足音しか聞こえない。

車のエンジン音も足音や人の声で搔き消され、信号音がやつと聞こえるぐらいだ。

しかし何なのだろう。人の多さで前がよく見えない。余所見して歩くと迷つてしまふ可能性がある。

そんなことを考えている内にドンッと人と肩がぶつかる。

「あっ、すいませ」

謝るにも人に流され立ち止まることが許されない。

恐い。そう肌で感じ、人のいない所へと走る。

「……はあ……。はあ……」

着いた場所は疲れていてまだ辺りを見渡す気力もない。

規則正しい呼吸をするために何回も息を吸う。

落ち着きを取り戻し、腕時計を見ると針はちょうど真昼を指していた。

意外と早く本都に着いたな。^{（ヒ）}これからどうじよつ。

顔を上げ、辺りを確認する。

初めての恐怖に焦り、必死に人のいない場所へ走った結果、どこかわからない路地に居た。

ここまでどうやって来たのか……覚えていない。完全に迷子だ。

「はあ……。俺、馬鹿だ」

自分の情けないという感情が口に出てしまつ。

なにあの人の数だけでビビつてるんだ。

もしかしたらあの中に勇人がいるかもしないのに。

だけどやはり人が恐い。そう思い、来た道を戻るのではなく路地の

奥へと進むことにした。

それにしてまだ昼間だというのに薄暗い。

奥は真っ暗で何も見えない。

闇の世界があるのでないかと錯覚してしまつ。

一歩、二歩と歩くたびに表通りのざわつきが遠ざかっていく。

ここはよくテレビなどで薬物の取引などが行われている場所にそつくりだ。

もしかしたらそんな取引の現場に出くわすかもしれない。頭の中はそんなことしか浮かばない。

歩いてから三分くらいすると、この道の出口らしき先が見え、歩くスピードを速める。

道を出ると異変に気づき、足を止めた。

妙だ。

目に見えているものは一見すると普通の居酒屋などが並んでいる通り道。しかし、人が一人もいない。

微かに人の声や自動車の走る音は聞こえてくるが、この通りにはそれらしきものが一切ない。

そして、空からの光を防いでるような建物。

路地に入ってきたときに先の見えない闇を作り出していくのはこの所為だったのか。

今通ってきた路地よりも暗く感じるこの場所がどうこうといひなか頭の整理がつかなかつた。

並んでいる建物は居酒屋ばかり。それも、どこにも明かりがついていない潰れた店。

多分ここは数年前までは盛んな通りだったのだろ。見た限りでそういうところだつたというのがわかる。

しかし今は人の気配もしない。

薄気味悪い。一秒でも早く出たほうがよさそつた気がする。

再び歩き始めようとした途端、後ろから声がした。

「ねえねえ君！」

反射的に振り返る。

するとそこには男一人の姿があった。

一人はまだ寒い時期だというのにインナーを着ていない派手な豹柄のベストに黒いカーゴパンツを着た、金髪で筋肉質な若い男。もう一人は服装がウェイターに近い感じで顔の至る所にピアスが着いている銀色の髪をしたビジュアル系な男。

如何にも不良らしいその二人が近づいてくる。

逃げようかと考えたが、追われたら厄介だと思い、足を止める。

「ねえ、君どつから来たの？ もしかして迷子の子猫ちゃん？」

子猫…？

金髪の男が口元をにやけさせながら聞いてくる。

ここで使われている用語か何かだろうか？

いや、確かに歌であつたような気がする。

迷子の迷子の子猫ちゃん…。

そういう意味か。しかし、何やら嫌な予感しかしない。

この男たちは一体どこから来たんだろう？ さつきまで人の気配はしなかつたのに。

足音さえもしなかつた。いや、聞こえなかつた。

やはりここは逃げるしかない。それしか何も思いつかなかつた。

「あの、俺急いでるので」

「じゃあ俺たちが道教えてあげるよ。どこに行きたいの？ それ俺たちと一緒に」

男が話している隙みて、勢いよく後ろに足を走らせた。

が。

「うあッ！」

それは呆気なく失敗する。

金髪の男は逃げる事を予測していたのか俺の腕をすぐに掴み、その

勢いで地面に思い切り倒れた。

「馬鹿だなあ。逃げようとしてる」とぐらりわかつてんだよ

「……ツ！」

倒れたときに負った腕に痛みが走る。
そして、黙り込んでいたもう一人のビジュアル系の男が側に近寄り
口を開いた。

「それじゃ、逃げようとした罰を『え』としますかあ。ギヒッ！」
男は不気味な笑い声を出す。

その瞬間、男二人は突然襲い掛かり、金髪の男は両腕を。ビジュアル系の男は両脚を掴み自由を奪つ。

俺は体の自由を奪われながらも必死に抵抗しようと我武者羅に体を動かす。

すると、何やら金髪の男はベストの内ポケットから何かを取り出そうとしていた。

「そんなに暴れると、逝っちゃうよお？」

ポケットから取り出されたのは果物ナイフ。それを間近で見せつけられる。

「う……」

果物ナイフは徐々に喉へと近づき、危険を感じて抵抗するのを諦めた。

「そうそう。子猫ちゃんは大人しくしないとなあ。キヒッ」

男は両脚に自分の脚を絡ませて固定する。

下肢に違和感を感じ、そこへ視線を移すとビジュアル系の男が厭らしい手つきで太股を擦っていた。

「なにして……。やめ……」

男の手は徐々に物の方へと移動する。

「さ、触んなツ！！ 嫌だ！」

こんな経験は人生で一度もないのに恐怖に感じた。
怖い怖い怖い怖い。

犯される。 殺される！

「いいねえ。感じちゃつてる？」

金髪の男は、ナイフを喉元に押し当てながらゾワッとするような声で耳元に囁く。

抵抗することができないこの状況をどうにかしたかった。
逃げる方法はないのか！？

そう考へてうちにカチャツという音が聞こえ、目をやると銀髪の男の手がベルトを外そうとしていた。

「やめろッ！」

「うつせえなあ。そんなに死にてえの？」

金髪の男は皮膚が切れそうなぐらいにナイフを喉元に押し付ける。
もう駄目だ。ここで犯されて死ぬんだ……俺……。

誰でもいい。誰か、誰か助けて！

勇人ッ！！

俺は頭の中に思い浮かんだ勇人に助けを求んだ。しかし、ここは人通りが少ない。勇人以前に誰も助けに来る人はいない。
もう諦めよう。そう思つた瞬間だった

「何してんだよッ！」

どこからか怒鳴るように響いた男の声が聞こえたと思うと、二人の男は舌打ちをしてどこかへ走り去つていった。

恐怖から解放されたからか、安心すると体から力が抜け落ち、俺は起き上がるふとを忘れていた。

起き上がることを忘れていた。

助かった。

すると走る足音が聞こえ、それはすぐ側で止まる。

「おい、大丈夫か！？ しつかりしろー！」

「……ん」

誰かに呼ばれ、目を開ける。

なんだか体が宙に浮いているような感じだ。

誰かが俺の背中を支えてくれている。

その支えている手が優しい。

気が付くと目の前にいた男の人と目が合つた。

「大丈夫なようだな。お前、名前は？」

「……航^{カウ}」

てつくり勇人だと思ったが、男の顔は見知らぬ顔だった。しかし、なんとなく危険を感じないと想い、つい名前を口にした。

「航、か。立てるか？」

男は肩を貸して、航は何とか立ち上がる。

「あ…、ありがとう」

航は礼を言うと、その男の人を見つめた。

よく見ると、顔は整っていて身長は百八センチはある。明るいブラウンの髪色をしていて、左耳には銀色のステンレスピアス。黒色のPコートにそれに合ったジーンズが大人の香りを出している。

男も航の様子を見ていた。そして、口を開くと同時に手を前に差し出す。

「俺は迅速^{ハヤミ}だ」

何かと思つたがすぐに理解し、躊躇いながらもその手を握る。すると迅速は笑顔を浮かべた。

多分、これがこの人独自の挨拶なのだろう。

航は慣れない環境に混乱する。

何やつてるんだろう、俺…。

「で、何であんな奴らに絡まっていたんだ？」

「えつ？！」

唐突な質問にどう答えばいいのかわからなかつた。

「分からない。人のいない場所に行こうとしたんだけど、そしたらここに辿り着いて、さつきの奴らが…」

「ふむ。そーいうことか。んで、ここがどこなのかわかつてゐるのか？」

迅速は叱るような口調で航に訊く。

「…いや

「そしたら迷子か！」

「別に迷子になつたわけじゃないけど…」

間違つてもいいので何とも言い返すことができなかつた。

「ははっ。別に気に障ることじやねえだら。迷子は誰にだつてある！ だけどな、ここだけは気をつけろ。いや、ここだけでもないんだが」

迅速のその言葉には真剣さが感じ取れた。

しかしそく理解できない。ここだけは気をつけろといつてからいつてだろう。

航は気になることを訊いてみる。

「あの、ここってどこなんですか？」

「ん？ ここには夜蝶一番通りってところだ」

「夜蝶一番通り？ そこって有名な通りじゃ……？」

「昔わな。今は色々な事件があつてか誰も寄り付かなくなつた、ゴーストストリートつてところだ」

「ゴーストストリート……」

ここが、あの有名な……。

それを聞いてわかつた気がする。なぜさつきの奴らが俺を襲つたのか。

夜蝶一番通り。

数年も前の話だが、いつの頃からか同性愛者という者たちが集まるような場所になり、国内でも盛んな通りだつたという場所。テレビで時々映し出されていたので記憶に残つていた。

しかし、国内でも有名だつたこの通りがこんなにもなる事件つて一體……。

不意にある疑問が浮かび、訊いてみる。

「どうして迅速はこんなところに？」

「俺か？ うーん……”人探し”かな」

迅速は顎に手をやり返答する。

何やら答えたくなかつたような質問だったたらしく。

別にそれぐらいでどうとかなるとかの話でもないのに。

「さてと。いろんなところずっと居座るのもあれだし、ここから出るが」「へい

迅速は話を受け流すよつてさう言つて歩き始めゐる。

「どうした？ 早く着いて来い

そう言われるが、航は足を前に出せずについた。

もじこで迅速を信じたとして、着いていくと何が待つてゐるのか。
またあんな恐怖を味わいたくない。

だから今知り合つたばかりのこの男を信じていいのだどうかと困惑
している。

見た限り優しそうだし、助けてくれたけど。でも、どこかさつきの
奴らと同じなんぢゃないかと疑つてしまつ。

どうにも決断することができない。

「なあ。無理に信用しようとしなくてもいいんだぞ？ 僕はまだお

前をここから出したいだけなんだ

迅速は航のそばに寄り、真剣な目で言つ。

心の内を読まれたようで驚いた。いや、ただそれが顔に出ていただ
けなのかもしれない。

「航。俺はお前を襲つたりなんかしない」

その真剣な眼差しに嘘はない。

「…信用、していいんだよね？」

「…つたり前だろ！ そんぢゃ、出るが

迅速は笑顔で答え、再び歩き始める。

なんでだろう。迅速なら信じることができるそうな気がした。
航は迅速の後を着いていく。

先程まで薄暗かつたこの道が段々と明るくなつていて。それに、車
のエンジン音なども聞こえてくる。
やがて角を曲がると光が差し込んでいる道が見えた。

「着いたぜ」

その言葉と同時にこの闇の道の出口から明るい道へ入った。
太陽の光が眩しく、辺りの色彩がはっきりするのに少し時間が掛かる。

目の前には車が沢山走っていて、人もそれほど歩いている。
薄暗い闇から抜け出すことができたんだ、俺。

まるで奇跡が起こったかのような思いが湧きだす。
元来た道を振り返ってみると人の姿はない。暗く、光を寄せ付けない何かがあるようを感じる。

闇の世界。そう言うのに相応しい場所だ。

上を見上げるとアーチ状の看板があり、そこには『夜蝶通り2』と掲げられていた。

「なあ」

不意に声を掛けられ吃驚する。

振り返ると迅速と目が合つた。

「お前、ここのもんじやないだろ?」

「えつ。ああ……うん」

住んでいる所を聞いてきたのだろう。首を縦に振り返答する。

「どこから來たんだ?」

「來万智」

「來万智……! ?」

一瞬だが迅速の眼元がピクツとしたように見えた。

「そうか。わざわざそんな遠くから『苦労さんだな!』

急に迅速は笑顔になつて喋る。

遠くといつてもこの都市から電車で一時間ほどの距離である。
しかし、來万智と言つた時の迅速の様子が気になる。

「それで、何しにここへ來たんだ?」

「え? あ、いや……」

勇人を探しに来た。なんて言えるわけもない。

大体、国内で一番人口の多いこの都市で連絡とか無しに人を探すこ

となんて不可能に近い。

笑われるだけだ。

「ちょっと探検？ みたいな感じで…。ははは」

航は笑いながら誤魔化す。

「一人でか」

「そう…だけ?」

「ほお。で、どこへ探検しに行こうとしてたんだ？ 港？ 渋谷？」

千代田か！ それとも台東か？」

なに言つてるのかさっぱりわからない。

迅速の目は何かを見透かしている。

どうやら嘘をついていることが見抜かれていたようだ。

「いや、別に…。ただここに来たかつただけで、何も調べないで来たんだよね。ははっ」

「お前…、変な奴だな」

棘のある言葉が胸に突き刺さる。

すると迅速は顎に手をやり、何かを考える表情を浮かべ出した。

数秒すると、「よしひー！」といつ声と同時にその手はコートの脇ポケットに入る。

「俺がお前を案内してやる！」

「？」

「遠慮はいらねえよ。どつか行きたい場所あるか？」

本当に案内してくれるらしい。

嬉しかつたが、行きたい場所が思いつかない。

俺はまだ勇人を探すためにここへ来たのだから。

「じゃあ、落ち着ける場所」

行きたい場所なんて今は思いつかない。それに、数分前の悪夢がまだ頭に残っていたのでそう答えた。

「落ち着けるとこ？ そんな所に行きたいのか？」

「……うん」

「んー、わかった。じゃあ着いて来い」

そう言われ、航は迅速の後に着いていった。

やつぱり君に会えることまできなかつた。

今、何をしているんだ?

生きているよな?

また、会えるよな?

もつじんないと考えるのがおかしいのか。

やがて、その記憶は途切れしていく。

見慣れない場所。

柔らかい感触がする上に、航は仰向けになっていた。
頭には慣れない硬さの枕がある。

ここはベッドの上で、そばには窓があり外の景色がよく見える。
この位置からは黒く染まっている空しか確認できないが、そのおかげで今は夜中だと分かった。

隣には上半身裸の男が横になつて寝息を立てている。その男の後ろ姿は昼に見たことのある背中だ。

航は迅速を起こさないよつにベッドから抜け出し、そばにある窓から外の様子を眺める。

「……すごい」

思わず心の声が表に出てしまつほど、田舎では考えられない光景が航の目を輝かす。

そこには居酒屋やビルの灯りなどがまるでクリスマスツリーを連想させるかのような光が沢山輝いていた。

明るい所為か星は見えない。だが、街に点々とするネオンの光が航の心を落ち着かせる。

落ち着く場所に行きたい。そう願つた。

あれから向かつた先は、落ち着く場所とは正反対の騒がしいゲームセンターだった。

迅速と何所かズれてるようと思えたが、そうではなかつたらしい。

それから陽が暮れるまで色々なところを案内してくれ、夕飯は居酒屋で済まし、今は高そうなホテルの最上階の部屋にいる。

多分、迅速はこの夜景を見せたかったのだろう。本人は酔つていたのか部屋についた途端、服を脱ぎ出しへベッドへダイブ。すぐに寝てしまった。

だけど、ちゃんと願いが叶つたんだ。落ち着ける場所に行きたいと

いう願いが。

でも他に何か、……何か願いがあつたような気がする。

「はあ……」

思い出そうとしてもそれ以上思考が回らなく、溜息が出る。

今日はもう寝よう。明日、その何かを思い出せばいいんだ。

航は部屋に一つしかないキングサイズのベッドへと戻り、横になる。

スー。スー。

すぐ隣で良い夢を見ているんだなと感じとれる気持ちの良い寝息が聞こえてくる。

一体どんな夢を見ているのだろうか。

気持ち良さそうに寝ている迅速の夢の中に入つてみたい。そう思つた。

迅速の後ろ姿。何か習い事でもしているのか背中の筋肉が鍛えられていて男らしい。

この筋肉質の体に一瞬だけでもいいから触れてみたい。なんとなくそんな願望が生まれた。

相手は気持ちよさそうに寝ているので少しげらいは大丈夫だろう。恐る恐る迅速の背中に触れてみる。

感想は、……普通だ。ただ、温かい。

そしてそのまま手を腕の方へと動かした。

すごい。

力を入れていてるわけでもないのに意外に硬くて驚いた。

しかも肌触りが気持ちいわけで。そんなつるつるな肌にハマつてしまい、航は迅速の腕を何度か擦る。

その時、一の腕辺りらへんに一瞬、変な感触に触れた気がした。

また同じ所に触れてみるとやはり何かある。

何だろうと思い、迅速の腕を見てみるとそこには赤黒い傷のようなものがあった。

記号のエックスの様にも見える。といつよつこれは傷なのだろうか？

……駄目だ。

考えようとしても睡魔が襲いかかり、眠りにつくことになった。

辺りは真っ暗になり、何もない闇に包まれる。

「…………」「…………」

何となく遠くの方で誰かが俺を呼んでいる声がして、ゆっくりと目を開いた。

辺りは真っ暗で何も映し出されていない。

静穏な空気。今聞こえたものは幻聴だったのかと思わせる。

気のせいか と、再び目を閉じようとした時だった。

寝惚けていたからか自分が見ている光景が普通じゃないということに気付く。

視界には黒という色しか映し出されていない。灯りや物、人の影すら。

先程まで隣に誰かが居たような記憶が残っているのだが、それが瞼で思い出せない。

そんな中、どこからか騒がしい音が聞こえる。

音は段々とフェードインするように大きくなつっていく。

よく耳を澄ますとそれは単なる音ではない。人の叫び声だ。

声の主は一人だけではない。一人……いや、何十人もの叫び声。

その叫び声の所々に呻き声のような声も聞こえてくる。

俺は怖くなり耳を塞いだ。しかし、完全に防げるわけでもなく、まだ小さく声が聞こえる。

今度は目を瞑り、夢だと念じ始めた。

これは夢だ。これは夢だ……。

次第に叫び声は薄れ、そよ風が持ち運んでいくかのようにスースッと消えていく。

俺は耳を塞いでいた手をそっと離し、周りの音を確認した。

辺りは叫び声など聞こえない、静かな空氣に戻っている。

もう大丈夫だろ？と判断し、目を開けようとしたとき、グシャッ！
という音が急に間近で聞こえて吃驚する。

それは、何かを潰したような音で、同時に地面にそれが飛び散る音も耳に入った。

ビチャッ。グチャ！

「！」

音と共に温かい何かが右腕に当たった。
怖かつたが勇氣を出して見てみるとそこには赤い……、真つ暗で何も見えないはずなのに、腕に付着したその赤い”血”がはつきりと見えた。

驚きのあまり、声すら出でこない。

不意に地面に飛び散る音の事を思い出し、顔を下に向ける。

「うわあッ！」

そこには予想を上回る程の大量の赤い液体が広がっていた。
今立っている前方の辺り一面には真っ赤な血の海が。辛うじてそれは自分が立っている足場までには来ていない。
まだ間に合つ。

ここから逃げよとしたとき、どこからか声が聞こえ始めた。
薄らだが、それは目の前にある赤い海の中から聞こえてくる。

「……で……け。……けて……いの……」

ノイズが混じつているような声。

喉が枯れた声といった方が正しいのか、その声は段々と近づいてくる。

「……んで……けて……ないの？」

何かを訴えかけているようだが、話し声の途切れ途切れに泡の吹き出すような音が邪魔をして良く聞き取れない。

それを明確にする為に耳を澄まそうとしたとき、赤い海からブクブクと泡がたち始め、数秒もしない内にそこから黒い影が現れ出した。
見るとそれは人間の形をしている。

ただ、全身が黒色で染まっている所為で顔はわからない。だが、そ

の人影は俺を見ていると直感した。

「ねえ…。なんで僕を助けなかつたの？」

今度は鮮明に声が聞こえた。

まだ若い男性の声。どこかで聞いたことのある声だ。

それが、どこで聞いたのか思い出せない。

「僕を…助けないの？」

影はそう訴えかけてくるが、俺にはよく理解できない。

「一体、何を訴えたいのだろうか。

「し…いよ…、痛…いよ。…け…て、…助…け…て…！」

「俺にはどうする…こともできな…い…」

「何で…？　何で、何で何で何で何で」

苦しい声を出しながら何度も黒い影はその言葉を口にする。

「…『じめん』

その影には悪いがそう口にした。

途端、影の顔の部分からギョロリと大きな目が現れ、一いちらを睨みつける。

と、同時に金縛りが起り、身動きが取れなくなる。

まるでギリシア神話に出てくるメドゥーサを想像させるかのよう。

「や…めろ…」

少なくとも声は何とか出せるようだ。しかし、身動きが取れないだけではなく、苦しさも感じ始める。

何かで縛られているような感覚。体全体に電流が流れているような感じ。苦しくて、息がしづらい。

「一体、俺が何をしたっていうんだよ」

「……君が悪いんだよ。君の所為だ。君が助けてくれなかつたから僕は…」

影は悲しい声で呟つ口にする。

もしかすると、この苦しみはこの影が感じている感覚なのかもしない。

すると影は突然頭を抱え込み、苦しみ始めた。

「うあ……ああああ……あ、ああああああああ……出せー！
思い出せッ！！」

甲高い奇声を発した後、影はキリッといちいちを睨み付ける。猫のよ
うな細い瞳で。

その瞬間、過去の記憶がフラッシュバックした。
楽しい記憶。嬉しかった事や面白かった事。そして、悲しい記憶
。

我に返ると、再び恐怖が蘇つた。

「違う。俺の所為じゃない！」

身体が小刻みに震えだす。

影の正体が誰なのか分かつた気がしたからだ。

だけど、それを認めたくはなかつた。だから俺はそつ口にした。

「君の所為だ…。ああ、痛いよ…。助けて…、助け」

影が訴える最中に突然、ブウンッと勢いのある風の音と同時に何
かが影を命中した。

耳に残る鈍い音が聞こえた途端、影はその場に崩れ出す。

「たす…け、て…」

最後にその言葉を発すると、黒い影は赤い色に染まり始め、海と同
化し始める。

すると、再び前方から叫び声が聞こえ出し始めた。

一体何が起こつたのか分からなかつたが、危険だと感じて俺はその
場から逃げ出だした。

声のしないところへ。光のある場所へ。

しかし、走つても走つても光なんて一切見えない。

それに、叫び声が追つて来ているような気がした。いや、追つて來
ている。

早く。もっと早くと走るスピードを上げる。だが辺りは真っ暗で何
も見えない。何処を走つているのかもわからない。

出口なんてあるのだろうか？ そのままここから抜け出せずに俺も
あの影みたいになるのだろうか。そんな考えが脳裡をよぎる。

走り出して何分くらいだろうか。体力の限界が近づいてきていた。息が切れそうな中、辺りを見回しながら走っていると、田の先に黒ではない色が浮かんでいるのが見えた。

やっと出口に辿り着いたんだ。

そう思い込み、嬉しさが込み上がる。

だけどそれは絶望へと落とすものだった。

「なんなんだよこれは」

その色を見た瞬間、膝が竦み、地面に倒れ込んだ。

そこには先程の大量に飛び散った赤い液体。

「もう、終わりだ」

後ろからは叫び声が近づいてくる。

絶望へと落とされ、立ち上がる事もできない。

俺、どうなるんだろう。

やがて姿の見えない声の主たちが田の前まで迫り、自分を取り囲む。まるで籠田だ。

すると声が止み、辺りが静かになる。しかし誰かがいる気配は変わらない。

そして背後から誰かが近づいてくる気配がした。地面に金属バットを擦るような音と共に。

殺される。そう確信した。

二ヒイ。

奇妙な笑い声が聞こえたと同時に死を覚悟し、俺はギュッと田を瞑つた。

静かな空氣に温かいものを感じて、ゆっくりと田を開く。

辺りは光というもので明るく、周りの物を鮮明に映し出していた。航は身体をゆっくりと起こし、溜息をつく。

「夢、だつたんだ…」

また嫌な夢を見てしまったと、頭を抱える。

最近、悪い夢を見ることが多くなつてゐる気がした。

「…暖かい」

窓の方に顔を向けると、外からの光が照らし出していた。
そのおかげか夢のことなどすぐに忘れ、次第に意識を取り戻す。
隣りを見るところには誰の姿もなく、部屋には自分一人だけ。
なんとなく過去を思い返される。

キュッ、キュッ。

部屋の入口辺りから蛇口の止めるような音が鳴り、その後にバスルームのドアの開く音が聞こえた。

そこから出てきたのは腰に白いタオルを巻いた上半身裸の迅速だった。

どうやらシャワーを浴びていたようで、小さなタオルで「じー」と頭を拭きながら部屋に戻ってくる。

「おう起きたか。航もシャワー浴びれよ」

「えっ。あ……うん……」

航は迅速の姿を見ると安心してバスルームへ向かった。
迅速が先に入っていたからか暖かく、良い香りがする。
ゆっくりとシャワーの蛇口を捻り、温い水を頭から浴びる。
……良かつた、良かつた、良かつた。

航は水を浴びながら、そう心で何回も連呼していた。

もう誰も勝手に姿を消されるのは「ごめんだ」。

そして、髪や体を洗い流し終わり、バスルームから出る。

迅速は既に私服になつていて、部屋に置いてあるテレビをつけまらないさそうに観ていた。

ベッドには航の私服が綺麗に折り畳まれている。

「わざわざ折り畳まなくて良かつたのに」

「ん? ああ、暇だつたしな!」

「……」

これは礼を言った方がいいのか言わなくてもいいのかよく分からな

い。

航は私服に着替え始める。

「つか、悪いな。落ち着く場所に行きたいうつていうからすげえ良いもん見せようと思つたんだが…」

着替えている最中、迅速がそつ口である。

「もう見たよ」

「へ?」

「夜景、すゞい綺麗だつた。それになんとなぐ氣分が良くなつたし。ありがと!」

「お、おう」

まさか礼を言われるとは思つていなかつたようで、迅速は顔を赤くしながら鼻を人差し指で擦る。

「着替え。終わつたらここのから出ぬぞ」

「うん」

航は私服に着替え終わると部屋を出る準備をする。
準備といつてもただ荷物を肩に掛けるだけで後はちょっとベッドが汚れていたので綺麗に整頓しておいた。

「忘れ物はないか?」

「多分大丈夫」

「多分つて……。じゃあ行くぞ」

迅速と部屋を出て高層のホテルから外へ出た。

日差しが強くて眩しい。まるで夏のようだ。

「なんか欲しいものとかあるか?」

迅速はホテルを出たけれど先で足を止め、航に訊く。

「今は特にないかな」

「そつか。まあ今日は昨日とは別の場所に案内してやるから、行きたい場所とか見つかつたら言つてくれ」

そう言つて迅速は歩き出し、航もその後ろに着いていく。

四月に入り、真夏のような日差しの強い太陽が出ているところの外を歩く人は皆、厚いコートを着ている。

気温は相変わらず冬のようだ。息を吐くと薄ら白い煙が見える。

春はまだ来ないのか。

歩いてから十五分くらいすると、ショッピングセンターについた。航たちはメンズファッション専門店がある三階へと向かう。

「それにも柄に合わない服装してるよな」

店に入るなり迅速は航をジロジロ見てやう口にする。

「別に関係ないじゃん。俺の勝手だし！」

「ちょっとは人の目を気にしろー んー、ほんのがいいんじゃないいか？」

「派手すぎ！」

迅速が勧めてきたものは、ヘビ柄に銀ラメのドクロ模様が装飾されているジャケット。

こういうのは普通、ホストか……DQN? の人が着るものだらう。絶対俺に似合わないし。

人の目を気にしろと言わたものの、逆に迅速のセンスを疑つてしまつ。

「大丈夫だ。髪型を何とかすればいいける！」

「そういうもの!?!？」

航は髪型まで貶されたような気がし、内心落ち込んだ。

「冗談だけどな。……おっ！ これだこれ！」

迅速は選んだ服が似合うか航の耳先に出して確認する。

「おお。やっぱこれがピンと来るな！ だろ?」

「まあ、いいと思つけど」

その服を見て航は納得する。

冗談というの最初に選んだ服の事も含まれていたらしい。

「それじゃあこれで決まりな！」

「ちょっと待つて！俺、そんなにお金ないし……」

「いいんだよそんなの。これは俺からのプレゼントっことだ」

やつた！ ラッキー！

「つじやなくて。…何で、俺に…？」

「んー、そう言われてもなあ」

航は疑問に思った。

なぜ知り合つたばかりの他人に物を買ってあげようとするのか。しかもチラッと値札が見えたが、値段が万を超えていた。そんなの受け取つても逆に困る。

「服とかはいいから別の場所に案内して！」

迅速の背中を強引に押して、航たちはその店から出た。数歩先にある案内板の前に立ち止まり、迅速は口を開ける。

「どつか寄りたい場所あるか？」

迅速は案内板を見ながら航に訊く。

ここに記されている中から選べといふことだらう。しかし、いきなり訊かれてもすぐには答えれない。

航が「んー」と躊躇う中、迅速は何か決まったようでは案内板から目を離す。

「航、腹減つてないか？もう十四時だつていつの俺ら起きてから何も食つてないじゃん？」

「あー、だね。俺もお腹空いてるかな」お腹を押さえて腹減つてますを伝える。

実を言うと本当はお腹空いてるなんて嘘。

ただ、迅速がそりらしいので気遣つたのと、行き場所が見つからなかつた為、そう答えたのが事実だ。

「えーっと…、七階だな」

そうして一人は七階のレストラン街へと向かう。

七階へ着くと迅速は「ここにない」「ここもか」などと呟きながら店を探し回る。

「仕方ねえ。ここにすつか！」

そう選んだ店は、高級でもない普通のレストランだった。

迅速は高いものが好きなんだとばかり思っていたので意外だ。店に入り、席に着くと迅速は上着を脱ぎ始める。

「意外と店の中暑いな。あ、俺はもう決まってるから。好きなもん頼んでいいぞ」

航はメニューを取り、確認する。

お腹はそんなに空いていないから軽いものを…、と。

「それじゃあこれにするかな」

「おう」

呼鈴を鳴らし、決まつたメニューを店員に伝える。数十分くらい経つと料理が運ばれてきた。

「お前、そんなもんでいいの？」

「小食だからね。いただきまーす」

航は嬉しそうに、頼んだ帆立貝のクリームソラッケに手をつける。しかし迅速は頼んだハンバーグを不満気に見つめていた。

「食べないの？」

「俺さあ、実はカツの方がよかつたんだよねえ」

口調が微妙にチャラくなっている。

自分から頼むものを決めた上で店に入ったのに、ものが出た後に文句か。

思わず『子供かッ！』と口に出すところだつた。店を探し回っているときにぶつぶつ呟いていたのが分かつた気がする。

航はメニューを取り、それらしいものを探す。

「メンチカツならあるよ」

「あー、豚カツじゃないと無理なんだよね」

「こいつ。」

食べ物のことになると五月蠅くなるタイプなのか　と、心の中で思つた。

「ま、いつか！　いただきまーす！」

そうして迅速はハンバーグを食べ始める。

航も迅速と食べ終わるタイミングを同じにして食事をゆっくりと進める。

そして、食事の中間辺りで迅速は航に質問する。

「そういうえば、なんで航は本都^{ほんと}に来たんだっけ？」

「えつ？」

不意な質問に戸惑つ。

「き、昨日言つたじやん」

「だから、何だつたつけ？」

迅速は質問の答えを質問で返す。

「だから……」

どう答えればいいのだろうか。

昨日言つた言葉を忘れてしまった。

あれ……？

「どうした？」

航の異変に気づいた迅速は訊ねる。

「あ、いや……なんでもない。いいから食べよー。」

「お、おう……」

再び料理に手をつけた航に迅速は何も言い返さなかつた。

迅速も同じく残りを食べ始める。

何なのだろう……、この感じ。

俺が本都に来た目的を思い出せなかつた。

辺りには色々な建物が並んでいて一日では見回れない程の店がある。

居酒屋、カラオケ店、ゲームセンターなど。

航たちはショッピングセンターから出ると繁華街へ向かうことに、有名な円舞町^{えんぶつかよ}に来た。

「すごい人盛り……」

「俺から離れんなよ？」

「大丈夫だつて！」

そういうものの、ほんと数十歩くらい離れると見失いそうなくらいだ。

だけど並列に歩いてるから心配はないだろ？

二人はゆっくりと歩きながらそこら辺のものを見渡す。

「色々なものがあるんだなあ」

航は自分の住んでいる町とは全く異なるこの街に感心する。

「大都市の繁華街だしな。何でも揃ってるわー！」

「そりなんだ……」

「あ、そこ左に曲がってくれ」

迅速に言われた通りに左へ曲がると、車一台がやっと通れるような狭い道に入った。

ここも混雑しているかと思つたがそうでもなく、今来た通りよりは安心して歩けそうだ。

「航。ここに入つてみるか！」

航は迅速が指差す方に顔を向ける。

「T・I・A・R・A……。ティアラ？」

店の入口上に掲げられている英語を読み上げる。

ふと店の前に立つてゐる看板に視線を移した。

指名料一〇〇〇円、飲み放題三・五〇〇円……？

「なに、こいつ……？」

「キヤ・バ・ク・ラ・」

俺の真似ツ！？

「ば、馬鹿！ 行くわけないじゃん！ 俺まだ高校生だしつ！」

すると迅速は全力で拒否する航を見てグラグラと笑い出す。

「はつはつは！ 航……ここわな？ お空が、真っ暗にならないと入れないんだよ？」

迅速はまだ言つても分からぬ子供に教えるよつてジエスチャーしながら話す。

「こいつ、こいつッ。

航は眉にしわを寄せて迅速を睨みつける。

「冗談だつて！ 悪かつた」

「 つたく。次また揶揄つたら許さないからな」「ああ。もう絶対エにそんなことしない。ごめんな！」

「や、やめッ！」

ポンッと軽く頭に乗せてきた迅速の手を素早く振り払う。

「人がいっぱいいるんだぞ！？」

「別にいいだろ？ なつ！」

すると、また迅速は航の頭に手を乗せる。

「だからやめッ！」

航は魔の手から逃れるため、速足で歩き出す。

何なんだよ一体…。

迅速は話すたび俺に笑顔を見せてくる。なぜだか俺はその笑顔で虜になりそうだった。

このまま迅速と一緒にいたら…。そんな思いが心の底から湧いてくる。

「つて何考えてるんだ俺」

首を横に振り、我に戻る。

正直、知り合つたばかりなのにここまでしてくれる人なんていないので嬉しかった。

だけどその反面、それが怖いとも感じた。“何か”を忘れそうで…。

「あつ！ 航、ちょっとここで待つてくれ」

「えつ？」

突然迅速はそう言つだし、『HANSE』という看板が掲げられた高級感のある店へと入つていった。

「なんだよ…つたく」

仕方なく航はその店の向かい側にある壁に凭れかかる。何となくこの場所にも慣れた気がして辺りを見渡す。

すぐ横は十字路になつていて、道を挟んだ先には『GRETE』という『HANSEL』とは正反対のダークな店がある。

特にその店に疑問は浮かばなかつた。

だが目の前には沢山の人が歩いているのに『HANSEL』と『GRETE』の店が挟んでいる道を誰も通らうとしない。いや、通ろうとした人は何人もいたがその道を見ると皆引き返して別の道を歩いていく。

どうして誰も通らないのだろうか？ 少しだけ興味の湧く疑問が浮かんだ。

しかしあれだ。自分でも驚いたが昨日とはまるで違う。

こんな人盛りを田にしても恐怖など感じなくなつていた。

昨日の自分が馬鹿みたいだと心の底で笑う。

これは迅速のお陰だろう。

『HANSEL』に田をやると窓越しに見える迅速は迷つた様子で何かを見つめている。

一体何を探しているのやら

「！？」

不意に隣りの『GRETE』へ田をやると、そこに見たことのある男がその店から出てきた。

黒いライダースジャケットにそれに似た色のジーンズ。金髪で、遠くからでも分かる鋭い田つき。

何か、……何か忘れている気がする。

男は『HANSEL』と『GRETE』の間の道に入つていく。

その入つていく後ろ姿に過去の光景を思い返され、記憶が甦つた。

「 勇人！？」

男は人が通らない道の奥へと進み、航からどんどん離れていく。

このままだとまずいと感じ、まだ慣れてもない人混みの中を搔き分け、男の後姿を追いかける。

そして男はその道の先にあつた角を曲がり、航もそれを追いかけるように曲がる。

しかし、角を曲がると瞬間移動したかのように男の姿は消えていた。

なんとしてもその男を見つけようと航はその道の奥へと進む。

道には派手な格好をしている者しかいない。

ここは昨日通った夜蝶通りに似ている。

普通の私服を着ている航は逆に目立つ存在らしく、人の横を横切るたびに目をつけられる。

歩いている最中、五人の人影が航の行く手を阻んだ。

「痛ッ！」

その内の一人に突然両腕を封じられて身動きが取れなくなる。

「おい！ なんだよ！ 離せッ！」

封じられている両腕を乱暴に動かすが、相手の方の方が上でビクともしない。

抗っている中、その五人の中で一番存在感のある男が航に近づき、ニヤリと笑みを浮かべて航の顎を掴む。

「なあ僕ちゃん。ここ、どこだか分かつてんの？ 君みたいのが来るとねえ、食いたくなるんだよ……ヒヒッ」

この男が何を言つてゐるのか理解できなかつた。しかし、昨日の悪夢が甦る。

封じられているのは腕だけ。

航は両腕を掴んでいる男の膝を思いつきり踵で蹴る。

「ぐあッ！」

男の手が離れた途端、男たちを搔き分け全力で走つた。

「待ちやがれッ！」

後ろからは狩人が逃げる獲物を必死に追いかける。

航の足の速さは自分でも分からぬくらい全力だったが、相手の方が速かつた。

「あう、ツー！」

突然後ろからものすごい勢いが押し寄せ、ドンッという鈍い音と共に航は地面へ大きく転がつた。

それは何回転したのかも肉眼では分からぬくらい酷かつた。

「ナイス！俺の飛び蹴り」

「どうやら勢いは相手の飛び蹴りだつたようだ。

男はゆっくりと近づいてくる。

逃げようとしても腕に力が入らない。

「馬鹿な猫だな！」

男は足で航の背中を押しつぶし、地面に叩きつける。

「 ッ……」

それは痛いといつものではない。それを通り越し、息を吸うのもままならない程だ。

後から追いついた存在感のある男は地面に倒れこんだ航に近づくとその前に踞む。

すると髪を強く引っ張られ、強制的に顔を上げさせられる。

男の口は普通ではないくらいに見開いていた。

「なあ、俺たちから逃げられるとしても思つたあ？ ばああか！」

その瞬間、頬に強い刺激が走る。

一瞬の事で何だかよく分からなかつたが段々頬に痺れを感じ、殴られたことに気づく。

「さあて。これからどうするよ？」

男がそう言つたときだった。

「お前らを殺す」

その男の後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、見るとやうには迅速がいた。

「 ……迅速」

迅速の表情は普通ではない。

怒っているでもなく、脅している……でもない。

これから本当に殺してしまうのではないかと思わせるような口つきをしていた。

「なんだお前？ 俺たち相手に勝てると思つてんの？」

男等はクスクスと笑い合つ。

すると迅速が足を前に出した。

近くにいた男の顔面にストレート。その横にいた男にはハイキック。

「てめえ、何してんだッ！」

それをみた他の三人は一斉に迅速に襲い掛かる。

しかし迅速は構えのポーズをとり、相手の動きを確かめる。

「オラッ！」

殴りかかってきた男の攻撃を綺麗にかわす。

直後、目の前に棒のようなものが迫る。

それは殴りかかった次の男が出した右脚。

迅速はそれを平然と避け、笑みを浮かべる。

「喰らえッ！」

三人目の男は両手で右、左、右と迅速の顔面を目掛けて殴る。

が、手応えはない。

「次、いいか？」

迅速はその男に向けてそう口にする。

男には何の事かさっぱり分からぬ。

次の瞬間、男の脇腹に強烈な激痛が走った。

ミドルキック。

当たつた場所は急所だった。

男は受身すらできずに地面へ飛ばされるように倒れる。

「オラアアアア！」

次に襲いかかってきた一人には左脚で突き蹴りし、相手が前屈みになつた瞬間、右膝を顔面に噛ます。

反動で男はブリッジを描くように倒れた。

「てめえ…。ブツ殺す！」

残つた男はポケットから果物ナイフを取り出し、そのナイフを前に突進を仕掛ける。

迅速もそれに合わせて勢いをつける。

「迅速、危ない！」

危険だと感じた航は叫ぶが、迅速には届かない。

男との距離が一メートルもなくなつたとき、右脚を前へ出した。

フェイント。

その脚は相手に与える攻撃ではなく、相手のベルト上に掛かり、もう片方の左脚が相手の左肩に乗る。

そして左脚を勢いよく蹴り、空中へ。

人間は重力に引っ張られるため道具無しでは空中に留まることは不可能。

二階から何も無しで飛び降りるとしたら一秒も掛からない。

迅速はそんな一秒のわずか〇・一の世界で男の急所を確かめる。男は空中へ飛んだ迅速の顔が今まで見てきた中で一番の恐怖に感じた。

背景の陽が黒い影を生み出し、そのギラッとした瞳はまるで……。ギラついた瞳と目が合った途端、ブンッ！と風の切る音が鳴る。右脚を相手の頸に目掛けて大きく振り上げた。

サマーソルト。

迅速はその勢いで宙を一回転し、地面に着地する。

「クソガ」

その言葉と同時に男も勢いよく地面に背中をついた。

辺りはしんと静まり返る。

五人は地面に倒れたまま動く様子もない。

まるでアニメの戦闘シーンを見ていたかのように思えた。

「大丈夫か？」

迅速は航のところに駆け寄り、航の腕を肩に掛けてその薄暗い通りから外へ移動した。

見渡す限り、緑が生い茂っている。
どうやらここは公園らしい。

それにも巨大な公園だ。

田舎の來万智では考えられない。

航はあれから迅速に連れられてこの公園へとやつてきた。

迅速は航をベンチへ座らせるなり、「はあ」と溜息をついて、怒鳴り声を上げた。

「何やつてんだよッ！ 待つてろっていつただろうが！」「だつて勇人が

「勇人？！」

しまつた。

言い訳をしようとして、つい言葉を漏らしてしまった。

しかし勇人と口にした途端、急に迅速の表情が変わった。

それは、何かを知っているような……。

「痛ッ！」

さつき男に吹っ飛ばされたときに負った腕の痛みが今になつてまた痛み始めた。

「ちょっと待つてろ。今薬局行つてくるから」

迅速はそう言つて走つて薬局を田指していった。

航は痛みのある腕を押さえながら椅子の背に凭れる。

痛みを和らげるため、自然の音を聞こうと耳を澄ます。

サアアーー。

どこからか滝の流れる音がある。

鳥の声や草木の靡く音。

痛みの事なんてすぐに忘れることができた。けれど、勇人という名前を出したときの迅速の様子が気になる。

あれは、絶対に何か知ってるよな……。

「絆創膏買つてきた」

「びっくりしたあ

もう少し時間掛かると思っていたので、こんな早く戻ってきた迅速に吃驚する。

どうやら迅速は走つて来たようで、息をハアハアと吐いていた。

「走つていかなくとも良かつたのに」

「んなわけいくか！ ちょっと腕貸せ

すると迅速は強引といつていいのか、航の右腕を掴み、袖を捲りだす。

「つひ。もう痣になつてやがる」

迅速は小声でそんなことを口にしながら傷があることに絆創膏を貼りつける。

「つちもか？」

右腕の手当が終わるとそう問い合わせられた。

しかし、答える前に迅速はもう片方の左腕を掴んで袖を捲り、絆創膏をつける。

「これでよしつと…。もしかしてお前、脚も怪我してるんじゃないのか？」

「いや、大丈夫だよ！」

「いいや、念のためだ。ちょっと見せろ」

そして迅速は脚まで見てくれた。

この人にはお手上げだ。何でも見透かされるのだから。

脚に絆創膏を貼りつけてくれる迅速を見ながら航は口を開く。

「ねえ、迅速」

返事はなかつた。

だけど傷の手当では続いている。

話しさ聞いているだろ？

航は話の続きをし始めようとする。

「勇人のこと

「知らん」

即答。

迅速は話しの間に割り込み答えた。

俺が何を訊こうとしたのかを知っていたかのよつだ。
だが、迅速は俺を見ていない。

「俺の目を見て答えて欲しい」

「なんでそんなことしないとならん？」

「本当に勇人のこと知らないの？」

航は迅速の言つことを無視して問い詰める。

すると、迅速は突然航を強く抱きしめた。

「な、に……？」

「なあ。そいつのこと、そんなに大事なのか？」

迅速はトーンの落ちた声を口にする。

それは、迅速らしいとは思えない様子だった。

もし、運命が初めから決まっているものだつたら俺は知りたい。

この先、どうなるのか。どうすればいいのか。
俺は何のために、誰のために生きているのか。
それは、時が進めば見えてくるのだろうか。
そして、その時はどのように動くのだろうか。

運命とは一体……。

『なあ、そいつのことそんなに大事なのか?』

寒い風が吹いている公園。

人気のない場所に一人はいた。

一人は自分の思いを寄せようと/orする人。

もう一人はその思いに応えることができず、困惑した表情を浮かべる人。

俺は、何のために勇人を追いかけている?

何も言い返せなかつた。

俺にとつて勇人は大事な人なのだろうか?

ただ俺が勇人のことを思い続けているだけで、勇人は俺のことどう思つていたのだろうか。

「俺じや、駄目か?」

「えつ?」

迅速は航に真剣な眼差しをおくる。

「俺ならお前を大事にすることができる。航がそいつにどんな想いがあるのか分からんけど、俺はお前を大事にする。だから、そいつのことは忘れるよ」

勇人を忘れる……。

果たして忘ることはできるのだろうか?
思い出してしまった記憶。

俺は勇人を探すために、会う為にここへ来たのだ。

「ごめん、それはできない」

「どうしてもそいつじゃないと駄目なのか? 理由を教えてくれ!」
理由。

迅速に教えて意味があるのだろうか。だけど迅速はそれを知りたがつていてる。

教えるべきか。

「…全部、俺の所為なんだ」

「？」

「高校一年の頃、勇人と俺は仲良しだったんだ。勇人は優しくて、話も合って毎日が楽しかった。でも、それをぶち壊す奴らがクラスにいたんだ」

「ぶち壊す？」

嫌なところを衝かれ、航は躊躇する。
やつぱり話すのをやめようか。

迅速に話しても意味ないじゃないか。
でも、それが罪の償いとなるなら
「いじめだよ」

「……」

「そして勇人は学校に来なくなつたんだ。全部、俺の所為だ。俺は分かつていたのに勇人を助けられなかつた。恐かつたんだ。大好きだつたのに！」

全て言い切つた後に気づいた。
目から冷たいものが溢れ出している。
無意識のうちに泣いていたのだ。

「航……」

そんな航を見て、迅速は優しく抱きしめる。
理由を訊かない方がよかつたかも知れないと後悔した。
「ごめんな。無理にそんな話させちまつて。辛かつただろ？」

「く……う……。うう……」

「でもな、航。そいつが学校に来なくなつたのはお前の所為じゃない」

「違う。俺の所為だ」

航は迅速を突き飛ばすようにして離れる。

「俺の所為なんだよ」

「お前の所為じゃないッ！」

「やめてくれッ！――どうしてそんなことが分かる？　迅速、そば

にいたわけじゃないのに

「それは……」

何も言い返せなかつた。

俺は、最低な奴だ。

善人ぶつてるだけじゃないか。

普段は優しくしておきながら、こういうときには何も言えない。

相手に突き刺さる言葉を与えるだけ。

なあ、どうやつたらお前を慰めることができる？

分からぬ。

俺にはどうしたらいいのか……。

「航

迅速は航の頭に手を乗せようとしたが、航はそれをすぐに拒否した。

「ごめん」

そうしないと勇人のことを忘れるかもしぬなかつたから。

つい昨日会つたばかりの迅速の優しさに航の心は揺れ動いている。

恐い。再びそういう感情が出てきた。

もう一度と勇人のことを忘れてくない！

もし忘れたら……勇人が消えてしまふ気がした。

「わかつた。じゃあ、けりをつけよう

「けり……？」

「もしお前が本当に勇人のことが好きなら俺はお前を諦める。でも、

そうでなかつたら俺と……、俺と一緒にいてほしい」

迅速は最後の言葉を恥ずかしそうな顔で口にする。

本当に勇人のことが好きなら……。

航は少し戸惑う。

俺は本当に勇人のことが好き……なんだよな？

「俺について來い。勇人のいる場所に連れてつてやる

「やつぱり。知つてたんだ」

「勘違いするな。”お前の知つてる勇人”じゃないかもしれないぞ

「どういう意味だよ？」

「そういう意味だ」

俺の知つている勇人じゃない?

迅速の言つたことがよく分からなくて心の内がモヤモヤする。

それから何も話すことのない無言の時間が続き、航は迅速に案内されるがままその後ろについていく。

人ごみを抜け、人のいない薄暗い道に出る。

そこは昨日、迅速と出会った夜蝶一番通りに似ていた。

その道を入つて少し先にある角を曲がると路地に入り、奥にある階段を上る。

すると、裏通りと言つていいのか、確かに人は沢山いるが車が一台も通つていらない道に出た。

やはりここも薄暗い。

全ては高い建物の所為だが、ここにある建物は何のために造られたのだろうか。見るに壁や窓が壊れていて使われていないものだとわかる。

漫画やアニメなどではよく見るが、この国にもこんなところがあるのが不思議だ。

この国一番の大都市ならではなのだろう。

「俺から離れんなよ」

「?」

無言の時間を解放したその一言が突然のことだったのによく聞き取れなかつた。

多分だがそんなことを言つたと解釈し、迅速から離れないようにする。

「……」

この裏通りに入つてから感じるのだが、気のせいだろうか?

道を通るすれ違いざまの人たちが此方を睨んでくるよつて見ている気がする。

それは自分に向けられているものなのか、それとも迅速なのか分からぬ。

その所為か安心はできなかつた。

本当に勇人はここにいるのだろうか？ そんな疑問すら浮かんでくる。

まだなの……？

そう言いたかつたが我慢した。

道の角を曲がり、狭い道に入る。

気味が悪い。

今来た道とは違う、人の姿がなく、二人の足音だけしか聞こえない。

無言の時間をどうにかしたかった。

何か喋ろうか。でも、何を話したらいいのか…。

早くここから抜け出したい。

航は必死に気持ちを抑えて我慢する。

「ここだ」

やつと迅速の口が開かれた。

長かつたと思える狭い道を抜けると、自動車が走れる普通の通りに出た。

だがそこはもう光の世界とは呼べない場所。

自動車なんて走っているわけもなく、人の姿も見当たらない。

道の右側の奥には広場が見える。

迅速はその道を歩き始め、航も後に続く。

奥へ進むと小さな広場へ出た。

その広場には航たちを取り囲むような怪しい店がネオンの光を發して建ち並んでいる。

自分たち以外に人らしい姿はなく、広場の中央にある噴水の音だけが静かに聞こえる。

「ここは？」

「グロウプラザ。ここら辺の連中はそう呼んでる」

「グロウプラザ……。ここに勇人がいるの？」

迅速に問い合わせるが返答はなかつた。

聞こえてなかつたのだろうか？

航は渋々と後についていく。

そして迅速はある店の前で立ち止まる。

店は全体が緑色にデザインされていて、看板には『Welcome to the Heaven』と掲げられていた。

「行くぞ」

迅速は店の中に入るぞといつも葉を送る。しかし、店の前には扉らしいものは見当たらない。

航は、どうやつて入るのか疑問に思つた。

すると、迅速は店と店の間にある道に入つていく。

後を追いかけると、そこには木でできた階段があつた。

航と迅速はその階段を上り、一階へたどり着く。

着いたところに木の扉があり、迅速はその扉を開いて航と一緒に店内へと足を踏み入れる。

中は外観よりかなり狭い一方通行のバーだった。

グラス、ボトル以外は全て緑色で装飾されていてなんとも気持ちわる……いや、個性的な感じだ。
しかし狭い。

カウンターの椅子に座ると奥へ進めなくなるぐらいだ。

迅速はそのカウンターにいる店員と話しこし始める。

どこからか聞こえる音楽がその話し声を搔き消し、聞き取れない。別にどんな話をしているのか興味はないさ。

ところで不思議に思ったことがある。

ここは一階のはずだが下にはどうやっていくのだろうか。それに、奥行きが異常に狭い。

階段を上がってきたときの長さと比べると、店の奥行きはもっとあつたはずだ。

それなのに何故こんなに狭いのだろうか。

そしてもう一つ。客が一人もない。

こんな個性的な感じの店だったら客一人いてもおかしくはない。

客だけではなく、ここに来るまでの裏通りには人が沢山いたが、こ

の広場には人の姿は見当たらなかつた。

そんなことを考えている内に迅速の会話が終わつたようだ。すると店員はどこかへ案内する仕草をする。

「航、こつねだ」

そつ言われ、店員にどこかへ案内される迅速の後ろに航はついていく。

部屋全体が緑色で装飾されていた所為で気づかなかつたが、店の奥へ進むと視覚トリックの様に壁と壁の間に隠れていた扉が姿を現した。

「こつてらつしゃこませ」

扉の前に着くと、店員はそつ言つて扉を開いた。

その言葉にどんな意味が込められているのかはわからない。

扉の先には下に繋がる階段があり、航と迅速はその階段を下りる。どうやら聞こえてくる音楽はこの下から掛かっているようだ。

一階に着くとそこは二階と比べものにならないくらい広かつたぶん五十畳くらいはある。

外から見たときよりやけに広い気がするのは気のせいか？

航はそこにあつた光景を疑つた。

目に映つているのは沢山の人の姿。

どれもみんなルーレットやスロットを楽しんでいたり、トランプや賽など賭け事をやつている者もいた。
まるでカジノだ。

「驚いたか？」

「う、うん。まあ……」

「ここのことは秘密だぞ？ 外に情報漏らしたら……。狙われる、
とだけでも言つておく」

迅速は途中で何か言つことを躊躇い、違う言葉に置き換える。

大体理解はできるから「大丈夫」と返した。

そしてその人の間を通りて奥へ進む。

広間を抜けると薄暗くて細い通路に入り、その先に見える古い金属

製の扉の前まで歩く。

扉の前へ着くと迅速は躊躇せずその扉を押し開けた。ギイイイ。

耳に響く音が鳴ると、扉は「オオオン」と音を立て完全に開く。最初に感じ取つたのは臭いだ。そこは体育館倉庫のような臭いがする小さな部屋だった。

その部屋の中央に吊るされているオレンジ色の電球がそこに居る者を照らし出している。

そこには数人の男たちが一つのテーブルを囲つて座っていた。男たちの手にはトランプ。その囲つているテーブルには札束。どうやらこの人たちも賭け事をしてたらしい。

航はそこにいる数人の男たちの顔を一人一人見ていく。

「なんか用？」

一人の男がそう口にした。

航は目を凝らしてその男を見つめる。

それは、必死に探し求めていた男だった。いや、まだ断言はできない。

男たちは全員こちらを見つめている。

航はどうしたらいのか分からなくなり、困惑する。

「！？」

突然、頭に優しく“何か”が乗つた感覚がして一瞬混乱した。優しくて、大きなもの。

その“何か”は、迅速の大きな手だった。

「こいつがお前に話があるって」

「……ふうん。で、なに？」

勇人らしき男がまじまじと此方を見つめてくる。

「話したいことが、あるんだ」

「だったらここで言えよ。それか、ここでは言えない話とか？ だつせえ」

男はそう言つと関係のない側にいた男たちまで大声で笑い始めた。

まるであの時みたいな様だ。

「 ごめん」

「 ……？」

「あの時は助けられなくてごめん！」

航はそう言って頭を下げる。

「何言つてんのこいつ？」

近くにいた男はそう言つと再び笑いが起るが、勇人らしい男はミリの笑いも見せずに航を見つめていた。

「おい、勇人？」

「え？ ああ」

やはり勇人なのか。

近くにいた男がそう言つた。

勇人はそばにいた仲間に名前を呼ばれ、その場の雰囲気に戻る。

「勇人。俺のこと、覚えてる？」

航は雰囲気に負けじとそう問い合わせる。

すると勇人の表情が少し固まつた気がした。

「何だよこいつ。勇人知ってるやつか？」

勇人は数秒黙り込み、口を開いた。

「知らねえよ。こんなやつ」

その言葉を聞いた途端、意識がおかしくなるような感じがした。

辛くて、胸の奥が痛い。

何もかもが考えられなくなるくらいに。

「おい。大丈夫か？」

迅速に声を掛けられハツとする。

気づかぬうちにボーッとしていたようだ。

「用が済んだならさっさと出て行つてくれないか？」

勇人の放つたその言葉に航は何も言い返すことができなかつた。

「……ごめん。迅速、帰ろう」

「いいのか？」

航は迅速の問いかけを無視して踵を返す。

いや、無視ではない。ただそれ以上何も考えれず、声が出せなかつたのだ。

「……航」

一瞬、小さい声で誰かに名前を呼ばれた気がする。でもそれは求めていた人の声ではない。すぐ隣にいる迅速が出した声だつた。

航は来た道をゆっくりと歩き出す。

「迅速、お前」

「勇人。お前、変わつたな」

迅速は勇人の話を搔き消すかのようにして口を出す。

そして航は迅速とその部屋を後にした。

「またのお越しをお待ちしております」

店員の挨拶と同時に店の外へ出る。

「うひゃー！ もつこんな暗くなつちまつて。今何時だ？ オヤジ

「！」

「……」

「ま、まあ気にすんなよ！ つても無理かもしれんけど……」

迅速の言葉は、無音のようになに航の耳に入らなかつた。

それほどまでに勇人の言つたあの一言が衝撃的だつたのだ。

辺りは既に闇に覆われている。

まるで今の自分のような。

俺は、一体……。

「 ツ！？」

突然肩に痛みが走る。それは迅速が無理やり組んだ腕の所為だつた。

「ここから出るぞー！」

「あつ、危ない！」

「大丈夫だつて！」

迅速は暗くてよく見えない階段を肩組みながら降りようとする。

その所為……いや、そのおかげで此方に注意を払い、先程の事を少しづつ忘れていた。

辺りは闇に包まれているが、周りにある建物のわずかな光が道先を教えてくれる。

そして迅速と一緒に広場から街へ。街から小さな公園に移動する。公園に着くとそこには誰もいなかつた。当たり前だ。

街灯に照らされたブランコに一人は座り、小さく漕ぐ。

キイ。キイ。

この音がどんなに寂しいものなのか、理解できる人はいるのだろうか？

そんなことを迅速は考えていた。

不意に航が口を開く。

「あれ、俺の知ってる勇人だよな？」

「……さあな」

やつと迅速の言つた言葉の意味が今理解できた。

『お前の知ってる勇人じゃないかもしれない』

確かにそうだつた。あれは俺の知っている勇人じゃない。でも、勇人なんだ。

最後に言われた言葉が脳裡に甦る。

『知らねえよこんなやつ』

思い出したくなくても思い出してしまい、涙が溢れ出してきた。

「うう……っ」

「お前、良い奴だよ。よく今まで耐えてきたな」

迅速は優しい口調で言つ。

航はそんな迅速にしがみつき、泣いた。

忘れない。

こんなに辛いとは思つていなかつた。

今までの思いをぶちまけたい。

誰に？

誰にでもいい。

そばにいる人。

そばには誰がいる？

温かくて、優しい人。

それは、誰 ？

俺の、いつもそばにいた人は…。

眩しくて、温かい。

それは太陽のような光。

過去の記憶がその光によつて呼び起される。
まだ諦めるには早いんじやないか？

やっぱり、勇人に逢いたい。

航は迅速の胸の中で思いつきり泣いた。泣き続けた。

忘れるために泣くのではない。

これから先を歩み続けるために、邪魔な気持ちを流すために泣くん
だ。

泣いてからどれくらいの時間が経つたのかは分からない。
けれど、迅速のお陰で気分がスッキリした。

「ありがとう」

「……いや」

迅速は小さな声で返答する。

「でも、ごめん。やっぱり俺、諦められない」

「……そうか。わかった！ 俺もやれるべきとこまで付き合つさー。」

「迅速……」

「まあ悔しいけどよ。俺がいないとお前、何もできないだろ？」「
その言葉を聞いて嬉しくなった。

やっぱり迅速は優しい。

これからも先、ずっと一緒にいたいと思えた。
大切な友人として 。

「 つと、忘れてた」

迅速はジャケットの脇ポケットから何かを取り出す。

「これ

取り出したものは迅速の手に收まるくらいの小さな黒い袋だった。

「さつき服買つてやれなかつたからよ。代わりに

恥ずかしい表情を浮かべながら、迅速は航にその袋を手渡す。

「開けてもいい？」

「ああ。気に入るかはわからんがな！」

航はその袋を開けると掌に中身を出した。

出てきた物は如何にも高そうな銀色に輝くリングのついたネックチーンだつた。

「すうじい…。これ、高かつたんじゃないの?..」

「値段なんか気にすんな!」

「つあ」

迅速は航の手からそのネックチーンを取り、それを航の首にかける。

どうしてここまで優しくしてくれるのだらうか。

昨日知り合つたばかりなのに……。

昨日……か。

なぜだか迅速と共にした時間はそれよりも長く感じた。

「おお、似合ひなあ！ やつぱり俺の田舎は正しかつたぜ」

「ありがと、迅速」

「いこつてことよー」

迅速は笑顔で親指を立て、グッドポーズをとる。航もそれをみて笑顔を浮かべた。

久しぶりな気持ち。

もう一度とこんな表情は出せないと思つていた。

だけど、出すことができたんだ。

航は久々の笑顔を思いっきり浮かべた。

「おっ。やつと笑顔見せたな！」

嬉しそうに迅速も笑顔を浮かべる。

迅速のおかげだよ。

恥ずかしさもあり、航は胸の内で礼を言つ。

「ねえ。このリングって何か意味とかあるの?」

「え! ? あ、ああ気にすんなッ!!」

何故か迅速は顔を赤くする。

「あ、そういうえばお前どうするんだ? これから泊まるところ決めてるのか?」

迅速は質問を流すように別の話題を持ち掛ける。

しかし……。

田嶋を考へていたので宿泊先のことなど考へてもいなかつた。
「ははーん。その顔は先のこと考へてなかつたって顔だな」
顔に出ていたのは分からぬが言つてることが当たつていたので
何も言い返せなかつた。

「俺んとこ、来るか?」

「迷惑、じゃない?」

「むしろ逆。一人暮らしで寂しかつたし、だから大歓迎だ!」

「じゃあお言葉に甘えて…」

そうして航は迅速の家へ泊まる」とこした。

昨年建てられた鉄骨造アパートに汚れや傷はない。

航はその綺麗な一階建ての四戸アパートの前にいた。

一階の一〇一号室のドアに近づくと、センサーライトが反応する。

画期的だ。

「汚い家ですがどーぞ。お客様」

「お邪魔…します」

「そう堅くならんくていいって…」

「うん。『めん』

中に入ると良い香りが漂つっていた。

どうやら収納棚の上に置いてあったお香がその匂いの元らしい。

玄関は特に汚いわけでもなく、綺麗にされていた。

「ちょっと俺そこの店寄つてくつから中で待つててくれ」
そつ言つと迅速は航を残して走つていった。

「自分勝手だなあ」

独り言を呴きながらも靴を脱ぐ。

遠慮なく部屋の中に入ると先程口にしたことは違い、部屋は綺麗に整頓されていた。

しかし、意外だ。

迅速の顔からしてモノクロが好きそうに思えたが、部屋は明るいもので装飾されていた。

勝手に部屋を漁るわけにもいかず、航は中央にあるテーブルのそばに座る。

何をすればいいのだろう…。

部屋の所々見回すが、やはり綺麗だ。

俺の部屋とは全然違う。

綺麗好きなのかな？

そんなことを考えながら辺りを見回しているとドアの开く音が聞こえた。

もう帰つてきたのかと思ったが、部屋に入ってきたのはバスタオルを巻いた上半身裸の見知らぬ男だった。

「うおっ！？」びっくりしたー

それはこちらのセリフもある。

男は目を見開き、小さな声でそう口にした。

しかしそれはすぐに平静を取り戻し、何も気にせず男は近くにあつた冷蔵庫を漁り出す。

航はそんな男を見て混乱する。

迅速、一人暮らしだつて言つてたけど……。もしかして、家を間違つたんじゃー？

「あのー…」

「つあー！ うめつー オ前も飲むか？」

男は漁りだした缶ビールを航に見せる。

「いや、結構です」

「そうか」

「あの…」

「んー、何かいいもんねえかなあ」
人の話を聞いてない。

「これでいいか」

男はツマミのしき物と缶を手にテーブルを挟んだ航の前に胡坐を組んで座る。

近くで見ると、たれ目をしてるがそれなりに整つている顔つきだ。スパイキーショートの黒髪で、男前な感じ。

「あの」

「あー待った！ 今当てて見せる」

またかと思ったが、男は妙なことを言い出す。

何を当てて見せるというのだろうか？

「今お前が思つてるのは、どうして俺がここにいるのか、だろ？」
そういうことか。

どうやら俺の言いたかった事を当てようとしたらしい。
残念ながら当たりではない。が、外れたともいえない。

「ええと、少しあつてるかな」

「なんだよ少しあつて！ まあいいや。俺の名前は誓イチジョウセイだ。
一条誓イチジョウセイ。

ここの人と幼馴染つてやうね」

「そう、なんだ」

だからとは言わぬが、この家にあがつていたことがわかつた。

「お前は？」

「俺は、夏原航ナツハラ」

「ふーん。航、かあ。スカウトでもされたの？」

「え？」

その時、玄関のドアが開く音が聞こえて迅速が帰ってきた。

「コーウ。良い子にしてたかあ？」

「よー！」

「つてなんでお前がいるんだよッ！」

まるでコントのように迅速は家にあがり込んでいる誓にツツ「ハリをする。

「いやあ、うち今パンチでや」

誓は両手を合わし、申し訳ないというポーズをして口元にある。

「嘘つくな。人気ナンバーツーのお前が何言つてる」

「ああ、ツーだよツー！ ナンバーワンになれないツーだよー。」

「お前少し黙つとけ。ああ、それと金は貸さねえからな」

「なツ……」

誓はガツクリと頭を下げ、それから言葉を発することはなかつた。

「こいつのことは気にしなくていいぞー、航」

「え、ああ。うん」

なんの話をしてるのか……。

今さつ 誓さんの言つたスカウトといつ言葉がその話に結びついてくるが。

「それよりもどうだ！」

迅速の両手には大きなビニール袋が握られており、それを航の前にドサッと置く。

中身が袋の外まで溢れていって確認するまでもなかつた。

袋の中には大量の肉が入つていた。それも高級な物ばかり。

「今日だけ特別に奮発してみたんだ」

「す、すごーい。ははは

全然笑えない。

袋を見るとスーパーで買ったみたいだが、その中の量が容赦ない。

「これ、全部でいくらしたの？」

「ん？ エーとなあ。確か八万だつたかな

「……」

呆れてどつ突つ込めばいいのかわからなく、声すら出でこない。

スーパーの買い物で八万なんて初耳だ。

店の肉を全部買取つてきたのではと思わせる。たそかしレジをした

店員も驚いただろう。

なぜ八万円分もの肉を買ったのかもわからない。

そもそも迅速はお金の価値を知らないのだろうか。

「どうした？ 驚いて声も出ないか！？」

「べ、別に。てかこれ今日で全部食べるわけじゃないよね？」

そうだよ。三人でも今日中には無理に決まってる。

「当たり前だ！ 食べるに決まってる！」

これだもん。

大体迅速がどんな人なのかわかつてきた気がする。

航はわざと突っ込みを控え、残った分を迅速に食べさせようとした。

「そして、このためにもう一つ買ってきた物があるんだ」

迅速はそういうと部屋を出て何やら玄関に置いてあつたものを持ってきた。

「ジャーーン！ これぞ焼き肉用の『焼肉屋さんスーパースペシャル・

ウルトラデラックス』だ！ 僕ってなんて準備の良い男なんだ」

「自分を褒めてるとこ悪いんだけど、それこのテーブルより少し大きいや？」

「それがどうかしたか？」

「え……」

迅速のことわかつた気がしたって思つたけど取り消し。

この男はよく分からない。

頼れそうな一面がある反面、じつは天然が混じつていると理解に苦しむ。

「お皿を置く場所ないから」

「…………あああああああ……とでも言つと思つたか？」

「今言つたじやん」

「まあ外を見てみろ」

「外？」

迅速はベランダの方に指を指す。

明るい黄色のカーテンが閉まつていて外の様子はわからない。

航は閉まつていたカーテンをゆっくりと開いた。

「すげえだろ？」

自慢をするかのような口調で迅速はそう言つ。

カーテンを開くと、そこには庭が広がつていた。

庭の中央には大人数用のログテーブルと丸太椅子が備え付けられている。

ログテーブルの長さは三メートルくらいで、隣りの一〇一号室の庭との間にある。

「すごいやけど、隣りの家の人迷惑じゃない？」

「気にすんな。隣りはこいつの部屋だから」

迅速は親指で誓の方に指をさす。

「そうなの！？」

「ちなみに上の一〇一号室も俺の部屋だから」

なんといつ……。

部屋が一つだけじゃ物足りない理由があつたのだろうか？ にして

も家賃は一倍なんだろうな……。

お金持ちは羨ましい。

「ほら、準備すんぞ」

迅速は航の頭にポンッと手を乗せ、庭へ向かつ。

いちいち頭に手を乗せないでほし……。

「誓さん、そんなところで落ち込んでないで一緒に食べましょー！」

航は部屋の隅で小さく蹲つている誓に声を掛ける。

すると誓は、まるで蜘蛛のような歩き方と早さで航に近づき、両手を握る。

「ひいっ！－！」

「航くん。君は優しいよ。優しすぎるよ！ あの男と違つてビックリした……。

誓はそう言つと庭にいる迅速を睨みつけた。

「誰があの男だ。大体お前なんで人の家勝手に上り込んで勝手に冷

蔵庫漁つて勝手に酒飲んでんだよ

「いいじゃねーか。幼馴染なんだし?」

「だから金借りるとでも思つてるのか。つかお前、先月二三百だろ

? それどこにいったんだよ」

「そ、それわだな…。さ、航くん。俺たちも準備しようかー。」

迅速の話を逸らすようにして誓は台所に向かつ。

自分には関係のない話だが、少し気になつた。

それから三人は準備をする。

テーブルには紙皿にコップ。メインの肉に野菜。そして焼き肉屋さんスーパースペシャル・ウルトラデラックス。

準備よし、と。

「それじゃ、航と出会つた記念に

「ちょっと待つて!」

航は隣りに座つている迅速の話を止める。

「俺と出会つた記念?」

「ああ。お前と出会つた記念にだ」

「なんか、変じやない?」

「変じやねえよ。人と出会つて、その出会つた日を記念にする人はいるだろ? 赤ん坊が生まれたら生まれたその日が記念になる。それと同じようなもんだ」

そうなのか?

ちなみに出会つたのは昨日だけど…まあそうなのかもしれない。こういう感じで祝杯されるのは初めてだつたから変だと感じたのだつ。

迅速にとつてはそれが普通なんだ。

「はいはーい。そろそろ俺も悲しくなるから乾杯しようぜ」

一人だけの会話に弾まない誓は口を出す。

「あつ。ごめんなさい」

「べ、別に。つか、敬語使わんくていい…」

誓は恥ずかしそうに頭を搔きながら言つ。

航は笑顔で返した。

そして三人は自分たちのジョッキを手に持ち、上へあげる。
「ほんじゃ、気を取り直して。航との出会いに」

乾杯ッ！

俺たちの出会い。

それは探し求めていた出会いとは違うけれど、嬉しかった。
これから先、一人ぼっちではないのだ。

嘗ては、この国一番の安全と信頼を得られる公共施設だった、ラスティ工病院。

今となつてはその名も口にされない。

何らかのトラブルにより院内は燃え盛る炎によつて何もかもが失つた。

取り残された患者の数は百数名。

救急隊が中に駆けつけた時には既に無惨な光景が広がっていたといふ。

数十年経つた今では、一部の人の手によつて綺麗に修復されている。中は相変わらず、落ちない黒い炭の所為で辺りは薄暗いが、気にはならない。

まして、この方がここに住み着いている者たちにとっては丁度良いだろつ。

一階の奥にある小部屋。

部屋のプレート看板には『特室』と表記されている。

焦げた跡で真ん中にある字が読めないが、特別室なのだろう。

「寝て、ないんスか」

一人の女性が、その部屋の窓から外を眺めている男性に話しかける。

「ノックぐらいしろよ……」

男は振り向かずとも溜息交じりな声で言つ。

「スマセン。開いていたもので」

女は気づいていた。

昨夜から男の様子がおかしいことに。だから確かめに来たのだ。

男は何も口にしない。ただ、晴れた空を眺めている。

「何か、あつたんスか。勇人さん」

女がそう口にする。

勇人は外を眺めたまま、口を開こうとはしなかった。
何か変なことにでも巻き込まれたのだろうか？

それとも体調が悪いのか。

勇人が気に掛かる女が口を開こうとした時、勇人の口が開いた。
「カレン。お前は俺のこと、どう思つてる？」

「なつ！ ななんスか急に！？」

不意な質問にカレンは戸惑いを隠せなかつた。
しかし、それは誤魔化す為のものだと気付く。

「一体何があつたんスか」

カレンの強情に呆れた勇人は、やれやれと溜息を吐く。

「昨日、迅速に逢つたんだ」

「迅速さんに…？」

「それも、俺のよく知つてゐる人を連れてな
よく知つてゐる人 ？」

カレンは思い当たる人物を想像する。
誰だろう？ 思いつかない。

その、よく知つてゐる人という言葉が気に掛かる。

「それで、迅速さん何か言つたんスか」

「…お前変わつたな、だつてよ。フツ、笑えるぜ…。俺は何も変わ
つちやいねエ。あいつが変わつたんだ」

勇人は憎むような声で言う。

「数ヶ月前の、ことつスよね」

カレンの不意な発言に勇人は固まる。

「あつし気づいてました。数ヶ月前から二人の様子がおかしくなつ
たこと。それに迅速さんが姿を見せなくなつたのも…」

「お前には関係ない！」

勇人はカレンの話を遮断する。

その言い方は怒鳴られるよりも別の、恐いものを感じた。
でも、関係ないはずがないのだ。

勇人は何かを隠している。

この話題は今出しても無駄だろ？

カレンは別の話に切り替える。

「今、あっしらの状況は危険です。何故この状況になつたのかはありますしには分かりませんが、情報が外部に漏れる前に始末しないと…」

「ああ、わかつてゐる。みんな揃つてゐるんだろ？」

「はい。あとは勇人さんの指示を待つだけです」

「…そうか。わかつた」

そう口にすると、勇人はようやく窓から目を離して振り返った。

勇人と目が合う。

その目は以前とは比べてまるで別物。

鋭い目は仲間であるカレンさえも動搖させるほどのものだった。
もしかしたら、もうあの時の勇人ではないのかもしれない。

「明日だ」

「えつ？」

カレンはいつの間にか気を取り乱していた。

「明日、決行だ

「は、はい。了解です」

勇人は指示を出し、部屋から出て行く。

カレンはその背中を見送った。

今日は久々に気持ちよく眠れた気がする。

ゆっくりと目を開くと、一番始めに思つた言葉。

外を見ると朝という感じではない。

ぼんやりとした意識の状態で昨晩のことを思い返す。

焼き肉をして、一通り食べ終わると片づけに入つて、それから部屋でまた……。

部屋の中を見回すと昨日のことどが嘘のように思える。

そこらへんの床には「ミが大量に散らばっていて机は飲み物や食べ残し物などでいっぱいだった。

そんな中、迅速と誓は「みに囲まれながら鼾もかかずに熟睡している。

普通は寝顔を見ると可愛いと思つのだろうが、迅速の寝顔はかつこよく見える。

迅速は一体何の仕事をしているのだろう。

昨日の話からすると、やっぱりホストとか…？

航は迅速の寝顔を間近で見ながらそんなことを考えていた。

「……ん。うわッ！…」

「いっ……てえ…」

目を開けると視界を埋め尽くすほど大きな顔があり、迅速はそれに驚いて後ろへ飛び退く。

しかしそこには生憎、誓がいて巻き込んでしまった。

「あ…、なんかごめん」

「おこおこ、起こすならもつと田代めの良い起こし方にしてくれよ」
迅速は頭を搔きながら言つた。

「それはこっちのセリフだ。……痛H」

起こすつもりはなかつた。と言えばどう返つてくるのだろう。何れにせよ面倒なので口には出さなかつた。

三人は数分程だらだらすると、部屋に散らばつてこる「ミの片づけに入つた。

昨日見なかつた物まで部屋に転がつてゐる。

一体どこから湧き出てきたのだろうか。

航は一キロ程あるんじゃないかと思わせるほどの大量の「ミを両手に」「ミ箱へ捨てる。

「ふう…。あとは掃除機かけるだけだね」

「そうだなあ」

「あれ、誓さんは？」

辺りを見回すと誓の姿が見当たらなかつた。

「もう来るんじゃねえか？」

「おまたー」

迅速が言った直後、掃除機を持った誓がベランダから入ってくる。
なぜ、掃除機を……。

「おう。サンキュウサンキュー」

「つかあれだ。お前掃除機ぐらい買え！」

「炊飯器のない奴に言われたくないな」

「なつ！！」

どうやらこの家には掃除機がなかつたらしい。
迅速は誓が持つてきた掃除機の電源を入れ、床に散らばっているものを見つける。

あとは任せればいいか。

航は暇潰しにテレビの電源を入れる。

黒い画面から映し出されたのは、この前やつていたドラマの再放送だった。

テレビの横に置いてあるリモコンを取ろうとした時、不意にラック棚に裏返しされた写真立てが目に入った。

それを手に取り、引っくり返す。

一枚の写真。

知らない制服を着た人たちが並んで写っていた。
その下には3・1中学校卒業と記されている。

どうやら中学卒業のクラス写真のようだ。

写真の中の人たちは皆、笑っていた。

暗い表情やムスッという表情をした者はいなく、全員が笑っている。
みんな、仲が良かつたんだろうな。

迅速、中学の頃と全然顔が変わっていない。一人だけ大人びている。
誓さんは同じクラスではなかつたのかな？

それでもみんな本当に楽しそうに笑っている。
迅速の隣にいる人も。

「……えつ？」

その顔を見た時、航の口から一言が漏れた。

「なんで？ よくわからない。」

一瞬だけ頭の中が真っ白になる。

「なに見てるんだ？」

航が何を見ているのか気になつた誓は、頭を覗かせるようにして手に持つていた写真を見つめる。

「わお！ 秋庭^{アキバ}顔変わつてないな」

「ん？ なに見てるんだ？」

二人して何を見ているのか気になつた迅速は航の手からその写真立てを奪うようにして取る。

「あつ、馬鹿！ まだ見終つてないつづーのに」

「あー、これか。懐かしいな」

迅速は誓を無視して写真を見つめる。

「迅速、それ……」

航が問い合わせる。

「これがどうかしたか？」

「その、迅速の隣りにいる人って……？」

航に言われて迅速は写真に写っている自分の隣りの人物を見る。

「それ、勇人だよね……？」

「……」

返事がない。

迅速の隣りに居たのは勇人だった。高校の頃とは少し違うが、紛れもなく勇人なのだ。

なぜ迅速は答えようとしないのか分からぬ。その所為で苛立ちが込み上がる。

「答えろよ。隣りにいる奴は勇人なんだろ？ どうして勇人がいるんだ？」

「そうだ。なぜ勇人がいる？」

航の住んでいる場所は本都から離れた場所にある田舎町。

そこにある高校で勇人と知り合った。

だから、なぜ勇人が本都に住んでいる迅速と同じ中学校だったのかが分からぬ。

元々勇人は來万智の人ではなかつたといふこと……？

「もし、この俺の隣りにいる奴は勇人じやないと言つたらお前は信じるか？」

迅速が口を開く。

勇人じや、ない　　？

「ふざけんな！　そいつは勇人だ！　俺が間違えるはずがない！」

「ちょっと航落ち着いてさ。俺にもよく分からんんだけど。どうしたん？」

突然の二人の心境の変化に理解できない誓は、まず航を落ち着かせて何があつたのか迅速に問い合わせす。

しかし、航の感情の変化は異常だつた。

航は誓に抑えられた腕を思いつきり振り払う。

「勇人じやないつてなんだよ一体……。そいつはどう見ても勇人だろ！」

「だから落ち着いてさ。お前も黙つてないで何か言つたらどうなん？」

「……ああ、すまん。航、お前今高校二年生だろ？」

迅速は冷静な口調でそう質問をする。

「それが勇人と何の関係があるんだよ！　俺は勇人が何でそこに写つているのかが知りたいだけだ！」

人がここまでおかしくなつてているといつのに迅速はどうして冷静な態度でいられるのか。

だが、それは俺を苛立たせる行為にしかならない。

迅速は何も答えず、細くした目で航を見つめる。

「さつさと答えろッ！」

我慢できなくなつた航は、今まで出したこともないくらいの怒鳴り声を上げた。

言つてしまつた。

言つてはいけない言動だとは分かつてた。

どつしてここまで怒鳴る必要があつたのだろう。

その言葉を発してからから気づく。

俺は、勇人の事に対しても敏感になりすぎていたんだ。

だつて仕様がないだろ？ 勇人の事が『好き』なのだから…。

でも、もっと良い方法があつたはずだ。俺が、迅速に冷静になつて

聞くべきなはずだったんだ。

全部、俺が間違つていたんだ。

「……」

その言葉を聞いて迅速は笑みを浮かべた。

「いや。俺はお前に気付いてほしかつたんだ。お前は勇人の事になると突発的になりやすいからよ。だから、じつするしかなかつたんだ」

「…………うん」

「お前、本当に勇人の事が好きなんだな」

迅速の声には、笑みの中に悲しみが混じつていた。

航は自分の行動を反省する。

さつきまでの自分だと、もう一度勇人につてもまた昨日の様におかしくなるに違ひなかつた。

しかし、迅速のお陰で自分を知る事ができたんだ。

自分のいけないとこを、自分で見つけ出すことが

「黙つて悪かつた。今からこの事を話すが……。悪いがジョウは一旦家を出てくれないか？」

「なッ！」

「悪い。一人きりで話したいんだ」

「そ、そそそうやつていつも俺を！ このッ、バカヤロオオオオオオオオオオオオオオ！」

そつ言つて誓は走つて家を飛び出していった。

部屋の中はしんと静まり返り、一人だけの世界となる。

「航。今から話すことは嘘もない本当の話だ。できればその話をし

ている間、口を挟んでほしくない。それを約束できるか？」

迅速の表情、話し方からしてそれは自分にとつて、きついものだと察する。

それでも聞きたい。写真に写っていた勇人のこと。勇人の過去のこと。

今の自分なら大丈夫。そう自分に言い聞かせ、航はゆっくりと頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752y/>

Laco～僕らの運命～

2011年11月26日19時51分発行